

41994

教科書文庫

4
810
41-1910
20000
44050

M

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

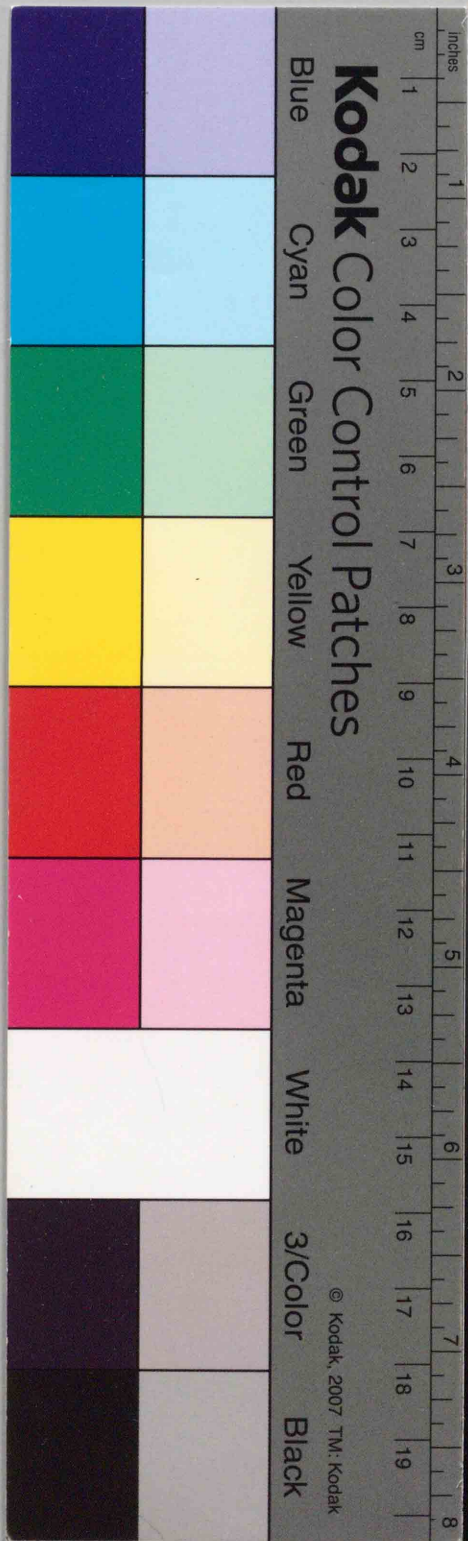


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Dk1
資料室

王國文學史教本

全



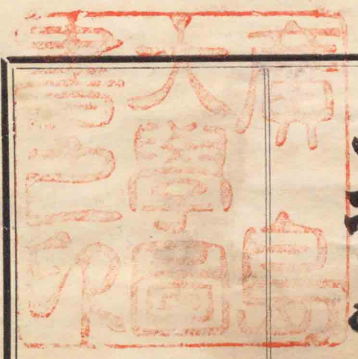
資料室 375.9
Ok1

岡井慎吾著



新體國文學史教本全

東京 晚成處藏



此書を讀まん生徒諸君に

一、文學史は、政治史が、制度治亂の事實によりて國家の沿革を明らかに比して、文學にあらはれたる現象によりて、國民性の發達をたどるものなり。即ち政治史は外面的にして、文學史は内面的なり。されば文學史を學ぶには常に政治史と參照せざるべからず、特に五年の日本歴史と。

- 二、芳賀博士は、その著「國民性十論」に於て、わが國民性を
 - 一、忠君愛國
 - 二、祖先を崇び家名を重んず
 - 三、現世的實際的
 - 四、草木を愛し自然を喜ぶ
 - 五、樂天洒落
 - 六、淡白瀟洒
 - 七、纖麗纖巧
 - 八、清淨潔白
 - 九、禮節作法
 - 十、溫和寬恕
- の十と立てられたり。本書は今之を

新體國文學史教本

一、祖先を尊ぶ：忠君愛國
 二、現實主義：自然を愛す：樂天洒落：勇敢敢死
 の二に攝し、汎論に於ては、特にその發展變化の迹を明さんと勉めたり。

三、文學史に引例の必要なる論を竣たず。但上下三千年の文例は此小冊子の收め得る所に非ざるを以て普通に讀本に載せられたるべきものは一切之を省けり。諸君幸に之を既終の讀本に求むるの勞を吝むなかれ。

四、書中年號には我國の紀元を左注し、引例中稍難き語句は卷末に略解を附せり。右肩に*を附せるものこれなり。或は諸君が自修の一助たらんか。

明治四十二年十月

著者しるす

新體國文學史教本

目次

序論	一頁
汎論	二
明治時代	
概説	一五
和歌	一七
俳句	一八
新體詩	一九
小説	二〇
德川時代	
概説	二三

和歌——狂歌狂文

二六

俳諧 俳文——川柳

二九

淨瑠璃附脚本

三一

雜文學

三五

小說

三九

近古時代

概說

四三

和歌

四六

連歌

四八

謠曲

四九

雜文學

五三

御伽草子

五五

狂言

五六

平安朝時代

概說

五九

和歌今樣

六一

雜文學

六三

物語

六八

奈良朝時代

概說

七一

記紀宣命

七二

萬葉集

七三

上古時代

概說

七五

傳説
祝詞
和歌

七七
七八
七九

四

新體國文學史教本

岡井慎吾 著

序論

人の思想感情が、文章の上に現れたる者を文學といふ。其思想感情は、國民毎に、各その特色あり。之を國民性といふ。我國の文學を通して、我國民性を知るは、真正にわが國家を理解する道ならずや。

萬世一系の皇室を戴きて、溫和なる氣候、明媚なる山水の間に生息せし我國民には、先祖先を尊び、現實に満足する氣風の根柢深く、漢學、佛敎兩思想の同化は更にとりくの色彩を添へて、國文學も百花亂發の春を現じ、今日の聖代に及び

文學史
の用

萬葉にあらはれたる外來思想のこの時代の文學程度

平安朝

萬葉と古今

の無常を説くものあるに至りては、誰か亦外來思想の影響たるを疑はん。

此時代になほ古事記宣命あり。宣命は現つ御神の綸言なれば、其性質祝詞に近く、古事記の精采は傳説にありて、その莊重雄健なる文辭の、敍事詩に似たるを見れば、文學はなほ歌謠時代を去ること遠からず。

漢字傳はりて既に五百年、國民の同化力はよく兩假字を發明して、此に國字を有するに至りたれど、朝野舉りて漢詩・漢文の模倣に忙しかりしは平安朝の初期なり。

同化の力は、なほ宗教には本地垂迹説、文學には歌集勅撰となりてあらはれ、古今集はかくて延喜の聖代に出でぬ。然れども萬葉と古今との間には大なる相違あり。蓋し古今にありては、前期の影響を受けて、威嚴ある文學は漢詩・漢文に限

この時代の特色と國民性

る如く思はれたるより、和歌は即興的のものとなり、且剛健尙武の風地を掃ひたれば、長大の詩形は全く亡びたる是なり。然るに此古今集は永く和歌の模範となりたれば、此等の弊の後世を毒せしこと幾何なりけん。

蓋し文弱は古今集の罪に非ず、時代の罪なり。平安朝ほど文弱なる歴史はなし。漢學に道義を學ばず、佛教に信念を追はずして、日夜浮華なる詩文・華奢なる行法に従事す、其志操の堅實ならざる知るべきのみ、況や此時に方りては、門閥の風成りて、人はたゞ宿命によりて浮沈せざるべからざるをや。此に於て彼等は情念趣味を偏重して、あはれにつきくしき生活を理想としぬ。然れども是亦花笑へば鳥歌ひ、露玉を鋪けば月白金と映る、あはれにつきくしき、我國の自然に養はれたるならざらんや。

女流文學の影響

文弱の風尚と藤原氏の外戚政略とは、女流文學を盛ならしめぬ。そも、我國民は實際的の國民なり、況や文學の中心の女子に歸せしをや。精細なる寫實に流れて、高遠雄大なる理想の影なきも亦已むを得ざるなり。

「大宮人はいかか云ふ」とも、祖先を尊ぶ風は關東に存して、地方豪族起り、藤原氏の權勢日に非なり。こゝに御堂關白の盛時を回顧せる歴史的述作出でぬ。

わが國の梅の花は、見れば大宮人は、いかか云ふら（阿部宗任）

新氣運

保元・平治の交倫常の頽廢極まる。されど社會として見れば、京師の動搖は豪族が中央における地位を認めざるを得ずして、階級制度の破壊となりて、到る處に一道の生氣動きて、道德に武士道起り、宗教に新佛教開かれ、文學には又歌風革新の聲、その反動たる歌論の旺盛を見たり。

近古

平氏は京師に入ること早かりし爲に、却て平安貴族に感化

文藝の二中心

せられりぬ。源氏は之に鑑みけん、府を鎌倉に開きて武斷治をなせりこゝに**近古時代**の幕は落ちぬ。

此時に注意すべきは、我國文藝の二中心を有するに至りしことなり。彼は京師・公卿にして保守的。此は鎌倉武士にして進取的。京師の誇は和歌にして新古今集あり。敍景の作を多くして、古今の弊を矯めたるは一應の功名なれど、和歌の賞玩が、修辭上の工夫洗鍊に重きを置きたる爲に、技巧に趨りて本歌取りの體を開けり。鎌倉に横溢せる、名節を尙び剛健を重ざる氣象は、上にいへる歴史的述作をして全く軍記たらしめぬ。但文事に短なるを武士の本來としたるほどなれば、その歴史なく習慣なきを利用して、新局面を開拓せざりしこそ、口惜しけれ。

佛教思想

佛教思想が萬葉に見え初めしは上にいへり。平安朝に入り

本歌取り

想

て、朝野の佞佛その極に達したれど、國民固有の現實主義は之をしも現世利益の一邊に考へて、徒に醫療息災の目的に供したり。然るに此時代に於ては、人倫上・社會上・悲風慘雨累りに至りて、流石に人生を悲觀せざるべからず。此時之が慰藉たるものは一の宗教あるのみなれば、新佛教は始めて國民の根本思想を動かして、此時代の文學に宗教的臭味を帯びしめぬ。

平安朝
の比較

南北朝合一して文藝亦一元となり、世は小康となるや、謠曲・狂言・連歌等出でぬ。此等に注意すべきは、謠曲には、親子は一世・主従は三世といひて、極めて主従の關係を重ずる感情發露し、かく親子は一世といひながら、而も平安朝の述作の男女の中らひを主とせるに比して、中々に親子の情を敘したる材料の多き、狂言が樂天洒落の國民性を代表して滑稽文

中二に
又二子

法門
所カウ

又修羅の聲矢
叫の音
震動せぬ
舞か日も
し所り
謠曲八
島
代徳川時
この前時
半のの大
精神

學をなせる、連歌の流行につれて、公卿・女房より僧侶に移りし文學が、更に武士の手に落ちたること等ならん。而して此連歌の旺盛は、和歌の煩瑣なる法門より脱せんとする洒落の氣風の反映なれば、これはた武士佛教(禪宗)の不立文字に關係なからんや。

應仁以來、否元弘以來、否承久以來、否寧ろ保元以來、平安の都はその名のみにて、又修羅道の鬨の聲、矢叫の音、震動せぬ日も無かりしに、元和元年大阪夏の陣ぞそのをはり、三河國の住人海道一の弓取徳川家康によりて、花のお江戸に三百年の昇平は開かる。之を徳川時代といふ。

げにや此時代に生れあへるもの、彼山・此水血に染められぬはなき父祖の物語に耳を掩ひて、誰か今の己が幸福を悦ばざる。此心は即ち我より古をなす大精神なり。見よ前時代を

通じて漲りし模倣の弊は一掃せられて、新著眼・新傾向の到る處に起れるを。

徳川氏が最も力を注ぎしは漢學なりしかば、漢學先開けて

仁齋2305の新著眼を見、和歌も之に促されけん、亦契沖2301・茂睡2306の新

研究・新主張起れり。奇なるかな仁齋は京師に、契沖は大阪に、

茂睡は江戸に出でて、偶公卿町人・武士三階級の中心地を代

表したり。但し大阪の誇は和歌にあらずして、檀林風の俳諧

浮世草子及淨瑠璃にあり。蓋し大阪は町人所頼むと云ふて

引かぬ所聞かぬと云ふて死する所にて、商賈ながらに任俠

風をなして、天平棒一本に一代の所帶をかつぎ上ぐる輩多

く、平民の勢力最も振ひたるを以て、前代の習慣に束縛せら

れず、浮世草子・淨瑠璃は平民社會を細寫して、實際的なる人

大阪は町人所
云々難
波入江
船
文學と
土地と
の關係

て憚らざりしならん。あゝ文學が土地の影響を受くること
も深きかな。

幕府の威權未だ加はらず、社會の階級なほ寛なりし間こそ、

かゝる新文學の活動も認められたれ。八代將軍以後文學の

中心江戸に移りて、世はひたすらに消極政略・制慾主義の呪

ふ所となるや、儒學の實踐・國學の尙古の聲は文學の根本を

も動かして、草雙子2376を讀み本とし、讀み本を歴史小説として、

勸善懲惡の紋切形もんきぎたとなし了んぬ。但しその爲に風教を維持

せる效渺からず、延いては明治維新の大業をも助けたりと

いはるゝなり。

徳川時代ほど太平なりしは國史上空前の事實なれば、文學

の樂まれたる範圍も頗る廣かりしを以て、是迄に隠見せし、

あらゆる國民性は各その特色を發揮したるこそめでたけ

この時代の後半
の傾向
あらゆる國民性

學文と政治
太平の眼を覺ます正喜撰たつ杯に夜も寝られず狂歌

れ。自然を愛する氣風は蕪村の如き純客觀の俳句となり、樂天洒落の氣風は蜀山人等の狂歌となり、一九三馬の滑稽本となりたる類これなり。この蜀山人・一九三馬等の輩出はいはゆる大御所様時代の前後にて、さきの大坂が文學の淵叢たりしに對して、江戸のさかりを示すものたり。此等の氣運に動されけん、新古今以來の和歌の積衰も、流石にその京都にて、小澤蘆庵、香川景樹等によりてすくはれたり。その後、たつた四杯の正喜撰に夜も寐られぬ世となりて、幕府の威權漸く動くや、國學尙古の思想は王政の復古を、儒學中外の論辯は外夷の擊攘を考へしめ、剩へ普く四民に讀まれし歴史小説は、その忠臣義僕たらんことを促してやまず、ここに志士の奔走、浪士の横行となりて、攘夷に起りし騷は尊王に終りたり。此尊王の二字には國民一齊に我を忘れ、身

を忘れ、家を忘れて相一致するを見て、誰か祖先を尊ぶ國民性の發露と知らざらん。

明治時代
新舊思想

明治維新以來すでに四十年、その初の十年は社會のあらゆる方面と事物とに破壊あらざるはなく、革新あらざるはなし。こゝに新舊思想の衝突を見しが、西郷星の落つると共に世は新思想の勝となりぬ。

歐化主義

この衝突の一半は政治論となりてのこり、新聞・雜誌これより盛なり。その影響として政治小説先出で、之と並びて翻譯小説行はれ、聖徳太子以來わが思想を培ふものとして重ぜられたる儒佛二教は遂にその株を奪はれたり。知るべし、歐化主義の二十年頃に於てその高潮を示せるを。憲法發せられ、議會開かれ、萬民の思想を支配せし政治も稍陳腐なる題目となれり。折柄社會の秩序も整ひて人心に餘

國粹保存

わが國の天職

裕あるより、文學始めて世にもてはやされぬ。抑著實なる文學は必ず前時代のそれを基礎とせざるべからず。此に古典の研究起りて、他の國粹保存主義と相合して、前の歐化主義に對せり。新しき小説二十一年・俳句の新研究・壯士劇皆此時に起る。二十七八年の役に國民の自覺成りて、東西の長所を採りて我に融二十一年化せんことの、わが天職なるを知るや、あらゆる文學は清新の氣に満ちて、教育の進歩につれて、建國以來曾て有らざる盛況を呈しぬ。而も祖先を尊ぶ國民性は萬古易らず、二十七八年の役に、二十一年遺憾なく發揮せられ、忠君愛國の美風は朝日の御旗と俱に萬國の仰ぐ所となれり。今は國威の隆前古に比なく、教育の盛後昆に傳ふべし。古に鑑みて今をはかるに、更に大文學のこの鴻猷に稱ふものなかるべけんや。

後昆

明治時代

概説

大事變
上下一心
にして盛
に經綸
を行ふ
を御
警文
第一

務その急

舊來の陋習を破りて、地公の道に基くべし。同第(四)智識を大に求むるに

明治の維新は、政權の移動幕府の創立に比すべく、社會組織の革新大化の新政にも過ぎたる大事變なり。此大事變にあひても、直に上下心を一にして皇基を振起せしは、美しきわが國體の精華なりけり。

維新の急務は智識を世界に求むるにありき。舊來の陋習を破るにありき。四年封建の制爲に壞れ、五年學校の制爲に布かれ、新聞紙爲に起り、二年電信・五年汽車等交通の利器爲に採用せらる。かゝる際に新舊思想の衝突あるは免れ難き數ならん。一たび佐賀に、七年二たび山口に、九年三たび大に薩南の天に爆發せしが、何れも一敗地に塗れて、明治政府の根柢いよく固く、西洋

に皇基
を振起
すべし
(同第五)

わが國
體の影
響

國民の
自覺

崇拜の風うたゝ熾なり。

新しき思想の中にも、或は實利主義あり、或は平等主義あり、或は國家主義あるなど、學ぶ所によりてその流を異にしたれど、其源は一に泰西にあらざるはなし。此平等主義は、政治上に現れて、所謂民權論となりたれど、流石に佛國風の極端なるものとならざりしは、忠君尊祖の國體の賜なりけり。物窮まれば變ず。二十年以後は國民の自覺もおひくゝに萌して、^{二十三年}教育勅語も發せられしが、二十七八年の役こそ大なる覺醒を與へたれ。夫、清國たる、大化の昔より先進國として畏敬せし所、儒學といふ道德説の發生せし所なるに、一戰克く之に勝ちたれば、國民齊しく自信自重する所を得て、日本主義の主張などともなりたれど、歐米諸國との關係は日一日に密となるを以て、その文物の影響著しく、遂に彼の長を採

いかは
和歌は
見られ
たるか
たるか
新進の
手

りて我に融化せんと試みるに至れり。ついで三十七八年の役亦名譽なる終局を見しかば、國民の自覺は一層の強さを加へて、あらゆる方面に生々の氣の漲らざるはなし。豈愉快ならずや。

今此時代の文學として、特に左の各種につきて述べんとす。

歌謠—和歌(新派) 俳句(新派) 新體詩

散文—小説

和歌

神代のまゝの姿を留めたる和歌は、さすがに維新の革新にも些の影響をも受けざりき。否、維新の氣を吹き込むに値せぬものと見棄てられたるなり。然るに二十年前後古典の研究究盛になると俱に、和歌も新進の士の手収めらるゝや、其

明星派
と竹柏
園派

内容の充實をはかり、從來の即興的なるに比して、深き多き思想を含ましむるに勉め、著想聲調に亦大なる革新を施して、此時代の新産物と數へらるべくなれり。その先鞭を著けたるを落合直文の淺香社とす。與謝野鐵幹その門より出で、二十九年「東西南北」に一世を驚かし、二十五年三十二年より「明星」を發行して、いはゆる「明星派」を起しぬ。之に對して竹柏園派あり。佐々木信綱の率るる所。作風新舊の間に出入して、その濫雅なるは明星派の雋拔なると相稱へり。

俳句

俳句の
特質
紫吟社

その形の短小なる、その趣味の特殊なる、俳句も亦久しく當代の影響を受けざりしが、小説を以て傳はるべき尾崎紅葉はその手をこゝに伸して、二十二年紫吟社を開きぬ。所在の月並宗匠

正岡子
規

寫生文

は、書生俳諧として冷罵し去らんとせしが、新機運は常に青年の手にあり、明治の新俳句はこゝに起りぬ。同時に正岡子規あり。此は蕉風より降りて、天明の蕪村を模範とせしが、なほ思想に、聲調に、明治の特色あり。日本新聞及雜誌「ほとゝぎす」にその作を公にせしかば、世に之を日本派といふ。虚子、碧梧桐その高弟たり。杜鵑が世を驚し、今一聲に寫生文あり。客觀の事物を直寫するの謂なり。客觀の美は蕪村の俳句の生命なれば、その著眼を以て文を綴らんとするなり。

新體詩

明治の新體は實に新體詩なり。新體詩の起れるは、その意寧ろ和歌の革新にありけん。

新體詩抄
文學界

此名は十五年の新體詩抄に始まる。二十二三年頃より之に従事する作家輩出せしが、文學界の同人は、調に七五の舊式を破り、想に世に悶え人を恨むる新様を出して、文學上の一境いよ／＼開かれぬ。

二十七八年後

二十七八年戦後、新體詩の氣焰更に揚り、武島羽衣、島崎藤村、先名を成し、が、土井晩翠亦適勁の調を以て世の注意を惹きぬ。

最近の傾向

その後詩論いよ／＼進み、是まで抒情に偏したりしものは、更に敘事の域にも入り、薄田泣菫、蒲原有明等その著名なるものたり。

小説

新聞記

一藩の陪臣より卿參議に擢でられし功名を慕ふ念、折柄輸

者の文筆

入せられし政治思想は、相合して幾多の新聞記者(政論家)を出し、が、渠等は或は翻譯小説を出し、或は自ら政治小説を筆したり。經國美談、佳人之奇遇等これなり。

小説神髓

十八年坪内逍遙小説神髓を著して、小説は一種の藝術なることを説きて、之を戯作と輕視するを戒め、又その本領は寫實にあり」と論じて、前時代の専ら勸懲の具に供したる傾向を非難せるは、いかに世を驚し、ぞ。ついで、浮雲出で、人物

浮雲

の性格描寫も試みられ、而も當代の新舊思想の衝突を材とせしかば、讀書社會は一方には彼議論の可能を認め、一方には此結構の新雋なるを喜びあへり。

硯友社の紅葉の美妙

時に硯友社の諸子の、いづれも新教育を受けて泰西文學を味へるもの、指を此に染めたり。その巨擘を上にいへる紅葉とす。紅葉は寫實の模範を我國に求めて西鶴を得て、その趣

言文一致體

露伴

心理小説

最近の傾向

向文章を學びたり。之と並びて山田美妙あり。彼が現代を細寫し人生を活現する小説の文體としては、言文一致の自在にして精細なるを取らざるべからざるを看破して、この一體を工夫したる功は、輕々に看過すべからざるなり。別に幸田露伴あり。初は亦西鶴を模倣せしが、遂に其本領を發揮して寧ろ理想派に近づけり。

げにや、當時は寫實といひ、理想といふも俱になほ幼稚にして、未だ個人性を發揮するに至らざりしが、二十七八年の交より心理小説起り、特殊の人物を取りて、特殊の觀念思想を寓し、以て寫實以外のあるものを捉へんとせり。紅葉の「多情多恨」最も名作とせらる。樋口一葉この比の「閨秀作家」なり。心理小説の弊は、敘述煩瑣にして、動もすれば廣き人生を包含せぬに至れり。こゝに新寫實的傾向起りて、實世間の人物

をありのまゝに直寫すれば足るとせり。かくの如きは、却て二十年頃の硯友社の言草に似たれど、その間に皮相と精神との著しき相違ありて、長足の進歩を示せるこそ昭代の譽なれ。

徳川時代

概説

慶應三年の政權返上より、²⁶²⁷ 泝りて、慶長五年の關原の役まで、²⁶⁵⁰ 凡二百七十年を徳川時代といふ。

關原の役終りて徳川氏の威權定まりぬ。家康おもへらく、戰國の慘は、社會の階級弛みて、個人のなすがまゝに任せたるに原因す。須らく學問を興して名分を正すべし」と、²⁶⁷¹ 林羅山を

家康の著眼

我より古をなす大精神

個人の勢力は認められず

その原因に数ふべきもの

延きて顧問とし、力を文教の振起に注ぎぬ。やがて文教は盛になり、既に述べたるが如く、我より古をなす大精神は、其文教の上に活動して、あらゆる方面の革新となりたり。その中心地は大阪。その時は元祿。¹⁶⁸⁸⁻¹⁷⁰⁴既にして、世は太平に狃れて、前日の意氣を失ひ、階級の制なりて、公卿、武士、町人、百姓の別侵すべからずなりぬ。その結果は家系の尊重となり、職業の世襲となり、果は個人の勢力を認めざるに至りしかば、人はたゞ才を屈して古人の跡をたどるのみなり。然れども事の此に至れる、なほ他に原因なからんや。

羅山幕府に登用せられてより、諸藩争うて儒者を用ひしかば、漢學の盛なる前古に比なけれども、その感化は學者に限りられたり。佛教亦、天草の亂後は、政治的に信仰の源となりた

武士道

文化文政の隆

りとはいへ、人心を支配する力は如何あらん。然らば大多數の徳義は何によりて維持せられたるぞ。武士道の完成これなり。蓋し武士道とは、わが國民性たる尊祖尙武の氣象が、儒教の名節、佛教の制欲等の思想に助けられて成りたるものにて、平安朝の末、豪族起りて主従の關係密となりたるに萌して、戰國時代に洗鍊せられ、こゝに及びて武士無上の道徳律となりたるなり。後心學起りて、専ら町人の間に行はれ、亦親に事へ、家を齊ふる要道を教へぬ。此等は自己をすて、君に家に殉するを主旨とす。個性の發露を妨ぐる亦已むを得ざるに非ずや。

世はなべて舊套を逐ふ。而もなほ文化文政の交、江戸文學の盛を見しは何故ぞ。國學ますく、盛になりて、古典の研究開けて、内容の豊富をいたし、又太平の久しき教育普及せる爲

幕府と名分の學

ならん。

家康が奨勵せし名分の學は、反て幕府の存在を容さざるに至りしが、外交問題の起るにあひて、つひにその思出多き大阪城に十五代のあはれをとゞめたり。此時代の文學の左の種類につきて述べんとす。

歌謠—和歌、狂歌、狂文、俳諧、俳文、川柳、淨瑠璃、附脚本、散文—雜文學、小説

和歌—狂歌 狂文

傳授採るに足らず

古今傳授を以て有名なる細川幽齋は、此時代の初まで生存して、堂上の門人も少からざりしが、2470號元祿革新の機運は和歌の根本的研究を促して、傳授のとるに足らぬを看破せしめて、2346號長流契沖、2361號茂睡を出し、かくて和歌は學者の手に歸したり。

三代集、古今集、拾遺集、後撰集

萬葉の研究

長流亦大阪の人、萬葉の研究者なり。

縣居門

契沖に次ぎて萬葉を研究せしは賀茂眞淵なり。2429號眞淵おもへらく「歌は眞心を表すを尊ぶ。然るに歌の眞なるはたゞ萬葉に在り」と、つひにその自ら詠める歌も萬葉調となりたり。眞淵は京都に學びて江戸に帷を下し、2468號が此こと文學の中心が江戸に移りし一因たりき。その門に橘千蔭、2471號村田春海ありて歌に長ぜしが、彼等は寧ろ三代集の風を慕へり。

歌に平語を用ふべし

この時京師に小澤蘆庵あり。2417號歌に平語を用ひんことを主張し、その作にも清新の調ありしが、香川景樹2503號その説を繼ぎて、和歌の道は「性情の誠を棄として分け入らんには、自ら進み易し」眞淵の如く古辭廢語にからめられては、天真の流露いづくにか在らん、耳近き語によりて、端的の感を詠み出すこそ歌なれと唱道せり。その門に熊谷直好2522號、八田知紀等あり。2533號干

桂園派

狂歌

狂文

種有功2514歌の如き堂上方さへもその流を汲むに至れり。
 文藝の中にも最も神聖視せらるゝ和歌に、似もつかぬ世
 俗卑近の材を取り合はせて、滑稽ならしめたるを狂歌とす。
 蜀山人、鹿都部眞顔等2183歌を巨擘とす。この意義を更に文に應用
 したるは狂文なり。2183歌

不二山を詠める長歌及その反歌

賀茂 眞淵

磯間より、そがひに見ゆる駿河の海沖つ波路は狭きかもふり放け見れば
 相摸根の、八重山峯は低きかも、天の原なる富士の根の麓を出で、風のま
 に横横をる雲に、駿河の海沖もかくろひ、相摸根の峯も雨ふり、時の間に雷も
 鳴り行けど、六月みづきの照る日の空にあらはれて曇るとも無く常夏とこなつに雪ぞ降
 りける不二の高根は。

不二の根の麓を出で、行く雲は、足柄山の峰にかゝれり。

鬼念佛圖贊

蜀山人

蝸牛かたがひの角折れては蠻觸ばんとくのあらしひ歇み外面は夜叉やしゃの如しといへども内

狂歌の如きものなり

檀林

宗因

貞門

正風

心菩薩の道にいれり身を墨染の奉加帳ほうかちやうつく度ごとに奥山の鐘の撞木は
 なまいだく

俳諧 俳文 川柳

元祿革新の機運が、大阪の平民的勢力によりて、そこに檀林
 の一派を建立せしことは既にいへり。此派は滑稽戲謔を以
 て俳諧の能事とし、材を實社會の平俗卑近なるに取り、且佶
 屈なる漢語、法外なる字餘りを試みて、その體を新奇ならし
 めたり。西山宗因2341歌を其巨擘とし、西鶴2353歌その門に遊べり。
 是より先、京都に松永貞徳の貞門あり。貞徳はかの幽齋に就
 きて和歌を學びたる人なるが、寧ろ俳諧を以て傳ふべく、御
 傘からかさを著して俳諧の格式を定めたり。
 宗因と俱に、貞徳の孫弟子たる芭蕉は實に正風の祖なり。松

芭蕉の特徴

尾桃青といひ、伊賀上野の人。李杜の詩、西行の歌を好み、兼ねて禪に遂かりしかば、貞門・檀林の俳諧が、宇宙の玄理と人生の奥底とに觸れぬを惜みて、此短詩形を以て自然の祕鑰を開かんとせり。蓋し自然を愛するは本來の國民性なりといへ、芭蕉の如く深く之を内視せんと試みたるは異數に屬せり。その門に其角・嵐雪等あり。

連歌と發句

抑、俳諧とは俳諧體（五七五七七）の連歌の略にて、連歌とは長短句を交る交る附け合はせて、其間に一卷の趣向を寓するにあり。然るに、後には發端の第一句のみを獨立せしめて、之を發句（まげ）といふに至れり。發句は我國の最短詩形にして、複雑なる思想を含み難きを以て、一の情景に伴ふ幾多の聯想の中に、一種の美をあらはさんとするなり。此幾多の聯想が、美しく聯結して成れるを俳文といふ。風俗文選「鶉衣」等その集なり。

俳句の特質

俳文

發句はその形小さくその用語自由なるを以て、誤て平民の手に弄ばるゝに至りしが、芭蕉が主張せし所は、天明の比蕪村等出で、之を發揮せしに止まり、その前後は理窟（ことわり）に落ちて俗化せしのみなりき。蕪村は文人畫にも堪能なりしかば、その句に有聲の畫の妙あるもの多し。

川柳

右の外川柳と稱すものあり、あらゆる人事を材として、奇警なる諷刺をなせる、江戸子の機智頓才によるもの多けれども、亦國民性の一面なり。

操

淨瑠璃 附脚本

淨瑠璃の名は、此種のものゝ祖に、淨瑠璃物語あるに由る。三絃の傳はるに及びて之を樂器とし、人形に合せて、操座（あやつり）にて語ることゝなりき。その曲としては前に金平本（きんぺいほん）あり、荒唐粗

金平本

門左衛門

厲の英雄譚にして、關東尙武の氣風にもてはやされしが、既に述べたる如く大阪の地に榮えて、近松門左衛門の才筆一世を驚かしてより、永く文學上の至寶となれり。
門左衛門は長門の人、京師に出で、仕官せしが、後淨瑠璃節の名人竹本義太夫に聘せられて大阪に下り、前後四十年、幾多の新曲を出し、樂と文と相待ちて浪華名物の一となれり。その作時代物と世話物との二に分れ、前者にありては主として事件の變化を寫さんとして、荒唐不稽にも陥りたるが、後者にありては特に義理と人情との衝突を描きて、能く現實の世相を詩化したり。

門左衛門歿後、なほ竹田出雲2116號・近松半二2143號あり。合作の風起りて、舞臺面の賑かさは却りて進みたりといへども、散漫にして統一の妙なし。且演劇の盛になるにつれて、操は壓倒せられ

出雲
半二

て、明和安永の頃には頓に衰へぬ。

吾人はこゝに脚本を附説せんとす。淨瑠璃と操人形との關係は、脚本と俳優とのそれに同じ。この意味よりいへば、淨瑠璃また一種の脚本たり。但し操は専ら人形を用ふれども、脚本は生きたる俳優によりて演ぜらるゝを以て、全く對話より成るを異とす。

出世景清の一節

近松門左衛門

さて(頼朝)御土器賜はり、諸國の大名残りなく皆々杯さし給ふ。重忠仰けるは「かゝるめでたき折といひ、且は我君御慰みの爲、吾殿屋島にて功の様子語って聞かせ給へ。内々君も御所望ありしぞ。平に平に」と有りければ、頼朝公を始め參らせ、満座の人々一同に「はやく〜」と望まるゝ。景清辭するに及ばねば、袴の裾を高く取り、御前に色代し、過ぎし昔を語りける。いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸兩陣を海岸に分つて、互に勝負を決せんと欲す。能登守教經いふやふ『去年播磨の室山備

中の水島・鶴越に至るまで、一度も味方の利なかりしこと、偏に義経が謀い
みじきに依つてなり。如何にもして、九郎を打ち取る謀こそ有らまほしけ
れ』とのたまへば、景清心に思ふやう判官なればとて鬼神にてもあらばこ
そ命を捨てば易かりなんと教経に最後の暇乞ひ、陸に上れば、源氏の兵餘
すまじとぞ駈け向ふ。景清之を見て、物々しやと夕日影に打物ひらめかい
て切つて掛かれば、こらへずして、刃向いたる兵も四方へばつとぞ遁げ
にける。さもしや方々よ、源平互に見る目も恥し、一人を止めんことは案の
うち物小脇にかい込んで、某は平家の侍景清と名乗りかけ、手取にせ
んと追うて行く。三保の谷が著たりける兜の鍔を取り外し、二三度遁
げ延びたれども、思ふ敵なれば遁がさじと飛びかゝり、兜を押ッ取りエ
イヤと引く汐に、鍔は切れて此方に止まれば、主は先へ遁げ延びぬ。遙に隔て
て立ち歸り、さるにても汝恐しや、腕の強きといひければ、景清は「三保の谷
が首の骨こそ強けれ」と笑つて左右へ退きにける。昔を忘れぬ物語御恥し
う候ふ」と語り給へば、人々は一度にとつとぞ感じける。斯くて我君御座を
立たせ給ひければ、大名、小名續いて座敷を立ち給ふ。景清君の御背姿をつ

くづくと見て、腰の刀をすりと抜き、一文字に飛びかゝる。各「これは」と氣
色をかへ、太刀の柄に手をかくれば、景清しごつて太刀を捨て、五體を抛ち
涙を流し、あゝ南無三寶あさましや、いづれも聞いて給はれ。かくあり難き
御恩賞受けながら、凡夫心の悲しさは、昔に返る恨の一念、御姿を見申せば、
主君のかたきなるものをと、當座の御恩は早忘れ、尾籠の振舞面目無や、眞
平御免被らん。誠に人の習にて、心に任せぬ人心、今より後も我と吾身を諫
むるとも、君を拜む度毎に、とても此所存は止み申さず、却つて仇とや成り
申さん。とかく此兩眼の有る故なれば、今より君を見ぬやうにと、いひも敢
へず刺添抜き………

雑文學

吾人は、雑文學の名を以て、小説脚本以外の散文を述べんとす、雑文學をその體より別てば、擬古文と和漢混和文との二となる。

漢學

混和文の起る原因

その名家

水戸學

國學

屢いへる如く、徳川氏の保護せしは漢學なるを以て、幕初新銳の氣に助けられて、林家の宋學の外に、中江藤樹の陽明學、伊藤仁齋の古學、山崎闇齋の垂加學、荻生徂徠の古文辭學等起りぬ。此等の士はいかに漢文に堪能なりとも、漢文さまで盛ならざる讀書社會に向ひて、言を立て書を著さんとするには之を用ゐるがたきを以て、漢文脈を交へたる假名文に頼らざるを得ず。これ所謂和漢混和文なり。貝原益軒、新井白石、室鳩巢、元祿の頃に出で、俱に著作に富み、益軒には教訓物、紀行書多く、白石には歴史考證物多し。やゝ後れて湯淺常山あり。

これより先、水戸に義公あり。彰考館を開きて、漢文にて大日本史を編し、なほ大義名分の説を立て、天下を率ゐらる。この自由研究の風と、大義名分の觀念とより誘起せられた

擬古文の起る原因

漢學の風氣一變す

縣門能文の士等

る一現象は、國史國文の上に、わが國體の眞意義を見出さんとせる、所謂國學の興起なり。伏見の祠官荷田春滿その首唱たり。眞淵この門より出で、我國固有の道を明らむるには、儒佛等の思想入り來らざりし時代の文章に親まざるべからずとて、その作る所に古語古調を用ゐしかば、爾後國學者の文は概この擬古體となれり。

然るに漢學にありては、學説には井上金峨の折衷派、詩文には山本北山等の古文辭を排斥するもの等起りて、風氣やうやく一變せんとす。

本居宣長眞淵の門より出で、博學高識一世に秀で、古事記傳に三十五年の心血を注ぎて國學を大成したる外、語學の創見も少からず。その著作はた擬古文の上乗なるものあり。

春海・千蔭ともに亦文名あり。春海の門の清水濱臣も能文の

白河樂翁

譽高し。又宣長歿後の弟子なる平田篤胤は、古道の宣傳に力めたり。25032歿

漢學と國民道徳

文學の保護者として、義公に比すべきは白河樂翁なり。文化文政の頃大老となりて、或は塙保己一が群書類121206歿從の編纂を助け、或は集古十種を撰ばしめ、自らも花月草紙24633を著せり。樂翁は彼寛政三博士を登用して、異學24616の禁を布きたる人なり。蓋し徳川氏が漢學を獎勵せしは、その尙古的精神階級的精神を利用して、此等の精神は徳川氏の政策と一致して、治國の助となりたるのみならず、わが祖先を尊び、實際を貴ぶ國民性と相まちて、國民道徳の中心となりたり。

然るに、後には漢學も文藝として玩ばるゝに至り、詩には菅

詩文の大家

茶山・頼山陽・廣瀬淡窓・梁川星巖等の作家あり、文には松崎慊堂・佐藤一齋・鹽谷宕陰・安井息軒等の大家を出すに至りしが、2457歿 2492歿 2515歿 2518歿 2504 2514歿 2527 2535

混和文衰ふ

その爲に、却て漢學者は直に漢文に力を注ぎて、混和文の名家なきに至れり。

東西學者の氣風

國學にても、春海・千蔭・濱臣等の江戸に在りしものは、文藝に向ひ、宣長の如く京都に近きものは、國體論より勤王論に進める跡あり。漢學者も、江戸にては、侯伯の門に出入して、詩酒に徴逐せしに、京都にては山陽・星巖の如き慷慨家となり、この京都の氣風は、幕末勤王攘夷の一大勢力をつくりたり。

小説

我より古をなす元祿2343—83の世に、浮世(今様の義)草紙あるも宜なるかな。その作者は誰ぞ。

西鶴2333歿は俳諧を學びて世にも許されしが、中年より、その輕妙なる雅俗折衷の文を以て、現實主義・快樂主義の風俗社會を

西鶴

芭蕉巢
林子と
の比較

寫實したり。西鶴は屢、芭蕉、巢林子と比せらる。芭蕉は眼を深
き自然に注ぎ、巢林子の著眼亦人心の機微に觸れんに在り
しが、ひとり西鶴は精微なる觀察力を以て、現實を寫すに止
まりて、亦何の理想の影をも認められず、是中々に現實主義
樂天主義の國民性に適したるものならん。その流を汲める
ものに八文字舎本あり。寛延Shōenの比まで盛に行はれぬ。
文運東遷したる江戸にて、寫實の波を揚げしは洒落本Shōryakuなり。
同時に又草雙紙Kusōshōjiあり、開帳見世物の流行などを寫したる繪
入の短篇なり。此兩者に對して、漢文の流行より來れる支那
小説の翻案あり、國文の隆盛亦助くる所ありて、遂に讀本Yomihonと
なりぬ。その作者に京傳・馬琴あり。
山東庵京傳Shōdōanは初筆を洒落本に染めて盛名ありしが、樂翁公
の出版物を取締るに及び、驚きて讀本に向ひたれど、遂に馬

京傳

八文字
屋本
洒落本
草雙紙
讀本

馬琴

時代の
影響

滑稽本
天明は
喰ふや
喰はぬ
に八九
年(川柳)
狂歌

琴の敵に非ず。
曲亭馬琴は、二十四歳より八十二歳までに、書き下せる者二
百に餘り、八犬傳2108頁の如き首尾百八十回に上りぬ。博覽多讀の
根氣に任せて、脚色亂れず、思想涸れず多々益、辨ずる著作堂
亦偉なるかな。偉人も猶時代を離るゝ能はず、家系尊重、個性
没却の思想は彼の筆を呪うて、作中の人は各種の徳の權化
として立ち働くに止まりて、復内的心理の發露なし、又好ん
で歴史小説を作れども、時代の背景明かならず、此は餘りに
己が理想に引き合せん爲に、歴史の事實を潤色せし故なら
ん。同時に滑稽本あり、豊かな御代にたんと寛政くわんせいと謠はれし大
御所様時代に、現實的・樂天的なる國民が、諸膝を栗毛の駒と
して、世をわたるをかしき、樂しさを敘せるもの、一九三馬を
其作者とす。
2101頁 2182頁

草雙紙の繪入の脈を引きたるに合巻物あり、柳亭種彦の田舎源氏をその冠とす。

鹽井川

十返舎一九

それより鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨強くして、橋落ちけるにや、行き交ふ人みづから股引を取り、裾まくりあげて、こゝを渡るに、彌治郎、北八もいざや引き連れて渡りなんとする折柄、京上りの座頭二人連、此川の歩渡りなることを聞けるにや、一人の座頭、犬市、モシ川は膝ぎりもござりまするかな、北八、左様左様、併し水が早いから、おめえ方あぶない、用心して渡んなせえ、犬市、ハア、成程水の音が餘程早いと云ひつつ、石を拾ひ、川の中へ投げ込んで考へ、犬市、いや、此處らがどうか浅い様だ、こりや猿市、二人ながら脚半を取るも面倒だ、御主若役におれをおぶつて渡れ、猿市、ハ、ハ、するい事をぬかす、拳で參らう、何でも負けた者がおぶつて渡るのだ、がよし、か犬市、こりや面白い、サア、こんさんな梅で、犬市、りやん、ごうさい、と、片手拳打ちながら、兩方から左の手を出し、互に拳を打つ手を握り合ひ

犬市、サア勝つたぞ、猿市、エ、忌々しい、そんなら此風呂敷包を貴様一所にしよ、わつせえ、それこれの、さあこい、さあこい、と支度して、背中を向ける、彌次、是は有りがたい、と猿市におぶされば、猿市連の犬市と心得て、さつさつと川へ這入り、難なく向ふへ渡ると、此方の岸に残りたる犬市、ヤ、猿市、どうする、早く川を渡さぬか、猿市、向ふ岸にて聞き附け、腹を立て、こりや申談じやうだんなやつだ、たつた今おぶつて渡したに、又そつちへ行つて、おれをなぶるな、犬市、こりや己れ、兄弟子に向つて言語道斷な、早く來て渡さぬかと、白い眼をむき出し、腹立てる故、猿市しかたなく、又こちらへ渡りて歸り、猿市、サアおぶさりなさる、と背中を出す、北八、しめた、と手を拍つておぶされば、猿市、又さつと川へ這入る、犬市は大にせき込み、これ猿市どこに居る、猿市、川中にてイヤ、こいつは誰だと、北八を川の中へどんぶり落す、北八、やい、助けてくれ、

近古時代

概説

此時代の
混亂

徳川時代に先だつ四百餘年は、實にこの近古時代にして、政
 權の所在より見るも、鎌倉幕府あり、室町將軍あり、織田氏は
 安土に於てし、豊臣氏は桃山に於てし、國家の大事より見る
 も、弘安には元寇來り侵し、文祿には六師海を渡り、南北朝の
 分立、應仁の亂の疲弊ありたる等、殆ど枚擧に遑あらず、い
 かに此時代の混亂なりしぞ。

江戸時
代との
關係

かゝる時代なるを以て、文學の玩ばれたる範圍の限られた
 ること、江戸時代に比すべくもあらず。その内容の乏しき亦
 同日の論にあらず。されども、徳川幕府に保護せられし宋學
 は此時代に傳來し、その式樂となりし能樂は此時代に發生
 し、淨瑠璃を生みし謠曲も、小説を孕みし御伽草子も、俳諧と
 根を同じうせる連歌も、脚本と趣を一にせる狂言記も皆此
 時代に成れるを見れば、文學史上決して輕々に看過すべか

佛教と
時代の
文學

らざるなり。

かゝる混亂せる時代として、人心唯一の慰藉は宗教なりしか
 ば、佛教は深く國民の思想に入りて、文學の内容にも、作者に
 も、その跡歴々たり。特にその甚しきは、文學が自己の目的を
 忘れて、弘法傳道の方便となりたる、かの傲岸なる義滿將軍
 が禪僧の前には叩頭禮拜したるに似たりけり。

武士道
の根柢

勇敢死を畏れざるはわが固有の國民性なりといへども、此
 時代ばかり之が演習をつけたるはなし。こゝに主従の關
 係確立して武士道の根柢成り、家名を重じ臣節を盡し、美
 談は幾多の軍記をのこしぬ。但し主従の關係は、名分正しき
 時にこそ治國平天下の方便たるべきに、承久の亂には義時
 も「さばかりの時は、胄を脱ぎ弓弦を切りて」と教へしも、南
 朝の初には「將軍より天位を賜はらせ給ひたり」といふに至

社會の
秩序

りたれば、社會の秩序壞れに壞れて、應仁の大亂を見たり。織田氏興り、豊臣氏繼ぎて、天下ほゞ定まり、美術は既に桃山時代の盛を見たれども、文學は之に伴はずして、此期終りぬ。この時代の文學の種類は。

歌謠 一 和歌 連歌 謠曲

散文 一 雜文學 御伽草子 狂言

和歌

新古今

新古今集が此時代の誇なることは既にいへり。後鳥羽上皇の勅によりて、定家・家隆等の撰ぶ所。當時は歌人輩出して、上には歌聖といはれたまふ後鳥羽（後鳥羽）順徳おはし、下にはかの二人の外、實朝・西行等の作家ありしかば、華實かね備はりて前後に傑出すといはる。

定家

定家は京極中納言と稱せられ、和歌の技巧群を抜き、且家學の根柢（根柢）さへありて、一代の仰ぐ所となりたれば、其一門は長く歌道の門閥となりて、和歌所の所領をも私有するに至れり。西行はもと北面の武士、世を遁れて旅行を事とし、その作清新を以て稱せらる。

西行

新葉集

新古今より以後、なほ十三回の撰集あれども、特色あるを見ず。たゞ弘和（弘和）中、宗良親王の撰ばれたる新葉集は後に勅撰に擬せられたるが、南朝方の歌を集めたる者にて、生氣の溢るるあり。蓋し境遇の然らしめしものならん。

傳授

歌道の門閥は、つひにその道を神秘にせん爲に、傳授といふことを起しぬ。新古今以來、技巧主義盛にして、古歌・古意の翻案を以て趣向を立つる風ありしに、その古歌・古意にかゝる制限を立つ。和歌の衰へたる亦宜なるかな。

連歌

鎌倉武士が、その清新の氣を以て、文學に貢獻する所あらざりしは、前に之を惜みたりき。されど武士の世なり。武士いつまで之に指を染めざらん。連歌は實にその手に落ちぬ。

連歌の起りは頗る古かりしが、菟玖波集出で、より、いよいよ世に行はれて、和歌の勢力を蠶食おとしたり。ついで宗祇法師新撰菟玖波集を編む。連歌が和歌者流を離れて獨立せる文學となりしこと實に此時に始まる。和歌の如く煩瑣なる法門なきこと武士の率直なる氣質に適しけん、大にその間に玩ばれたり。

や、後れて山崎宗鑑あり。之に滑稽洒落なる新趣味を加へて俳諧體の連歌を起しぬ。その撰に1700犬菟玖波集あり。此時代

菟玖波集

新撰菟玖波集

犬菟玖

波集 一句の讀捨

には、なほ言語の上に滑稽を弄するに過ぎずして、徳川時代に入れり、一句のよみすて實に此時に起れり。

われ一人けふの軍に名取川
君もろともにかち渡りせん
源 頼 朝
梶 原 景 時

雪ながら山本霞む夕かな

行く水遠く梅かをる里
河風に一村柳春見えて
宗 肖 宗
長 栢 祇 長 栢 祇

舟さす音もしるき明方

月やなほ霧渡る夜に残るらん
霜おく野原秋は暮れけり

(水無瀬三吟百韻下略)

謠曲

南天柱に楠天井の一枚張の風流を盡し、金閣寺は、長く三代足利將軍義滿の名を留めん。されど吾人は寧ろこれを謠曲によりて渠を記憶せんとす。謠曲は實に室町文學の偉觀なり。

神樂
猿樂

わが國は敬神の國なり。その神事に神樂あるは天岩屋の故事に本づくものならん。後には神樂の外に猿樂の伎をも行ふに至りしが、義滿の童坊たりし觀阿彌、この猿樂に諸の舞を折衷して一の舞ふりを定め、なほ舊に仍りて猿樂と稱しぬ。今いふ能樂これなり。この猿樂の爲に作りし章曲は即ち謠曲にして、一篇の結構に支那の雜劇を同化せし痕を見る、其數すべて二百餘番、神事に關するもの、歴史に關するもの、親子夫婦の愛を描きたるもの等に分たる。中にも子を失ひし母の狂氣して世をうき旅に尋ねありく様を寫せるもの

能樂と
謠曲

これに
現れた
る時代

少からず。是果して何の反映なるぞ。

景清

次第 消えぬ便も風なれば、露の身にかに成りつらん。名乗是は鎌倉龜が江が谷に人丸と申す女にて候。さても我父惡七兵衛景清は平家の味方たるにより、源氏に憎まれ、日向の國宮崎とかやに流されて、年月を送り給ふなる。未だ習はぬ道すがら、物うき事も旅の習又父故と心強く思ひねの涙片敷く草の枕露をそへていと繁き袂かな。道行相摸の國を立ち出で、誰に行方をとほとふみげに遠き江に旅舟の三河に渡す八橋の雲井の都いつかさてかり寢の夢になして見ん。詞やうく御急ぎ候程に是は早日向の國宮崎とかやに御著きにて候。こゝにて父御の御行方を御尋あらうするにて候。(申略)

里人あら痛はしや先此う渡り候へ。いかに景清に申し候。御娘御の御所望の候。景清何事にて候ぞ。里人八島にて景清の御高名の様が聞し召されたき由仰せられ候。そと御物語あつて聞かせ申され候へ。景清是は何とやら

ん似合はぬ所望にて候へども、是迄遙々來りたる志、餘に不便に候程に語つて聞かせ候べし。此物語過ぎ候は、^{彼者}をやがて故郷へかへして賜り候へ。里人心得申し候御物語過ぎ候は、^やがて歸し申さうするにて候。

景清いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸兩陣を海岸に張つて互に勝負を決せんと欲す。能登守教經宣ふやう、去年播磨の室山備中の水島鶴越に至るまで、一度も味方の利益無かりし事、偏に義經が計いみじきに因つてなり。いかにもして、九郎を討たん謀こそ有らまほしけれ」と宣へば、景清心に思ふ様判官なればとて鬼神にてもあらばこそ命をすてば易かりなん」と思ひ、教經に最後の暇乞ひ、陸に上れば、源氏の兵餘すまじと駈け向ふ。景清之を見て、^{物々}しや」と、夕日影に打物閃かいて、切つてかゝれば、こらへずして、刃向いたる兵は四方へばつとぞ逃げにける。逃がさじと、景清さもうしや方々よ地さもうしや方々よ、源平互に見る目も耻かし、一人をとめん事は案のうち物小脇にかい込んで、某は平家の侍悪七兵衛景清と名のりかけ、^{手取}にせんとて追うて行く。三保の谷が著たりける冑の鍔を取りはづしく、二三度逃げ延びたれども、思ふ敵

和漢混
和文の
起りし
原因

なれば免さじと飛びかかり、冑をおつ取りえいやと引く程に、鍔は切れて此方に止まれば、主は先へ逃げ延びぬ。遙に隔て、立歸り、さるにても汝、恐しや、腕の強き」と云ひければ、景清は「三保の谷が頸の骨こそ強けれ」と笑ひて、左右へのきにける。地昔忘れぬ物語、衰へ果て、心さへ亂れけるぞや、耻かしや。此方はとて^もいく程の命のつらさ末近し。早立歸りなき跡を弔ひ給へ。盲目の暗き所の燈火、あしき道橋と頼むべし。さらばよ、とまる、行くぞとの唯一聲を聞きのことす。是ぞ親子の形見なる。

雜文學

擬古的のものと、和漢混和的のものとの二あること、徳川時代と同じ。但し此時代に和漢混和的のものあるは、寧ろ國語の性質によれるならん。蓋し吾國語は母韻多く、且一定せる天爾波、助動詞文中に累出するを以て、文章平板に陥り易き患あり。故に雄壯莊重の文には漢語を用ゐて、これをすくは

方丈記

んとせるもの、即この文體の出でし故ならん。

方丈記は鴨長明の作と稱せらる。長明は此時代の初の人なり。ついで海道記、東關紀行あり。此二書が和漢の古辭を織り

なして、一種の文とせる様は注意すべき現象なり。

十訓抄

や、後れて十訓抄、古今著聞集等あり。十訓抄は十箇條の教訓を立て、幾多の例話を附せしより此名あり。

十六夜日記

和歌所の所領所有權の争より、婦人の身を以て遙々關東に下りたるは阿佛尼にして、定家の子なる爲家の婦なり。その紀行十六夜日記は此時代の擬古文の上乗なるものなり。

徒然草

兼好の徒然草は、題目によりて文體を異にするのみならず、その思想も雜駁を免れざれども、その議論の深遠なるものに至りては、わが文學の珍たるもの少からず。

正大なる議論を以て南北朝の正閏を論ぜし、准后親房の神

神皇正統記
増鏡等

皇正統記は國文體議論文の白眉と稱せらる。

又増鏡あり。吉野拾遺あり。増鏡は承久の亂より建武の中興までを、拾遺は吉野朝廷の逸聞を録せるもの。見るべし、大覺寺流と文學との關係淺からざるを。

此時代に特筆すべきは平家物語と太平記となり。平家と同時に保元・平治物語あり。又平家と同じ事實によりて源平盛衰記あり。平家の女性を描くや、緑の黒髪と俱に煩惱のきづ

平家物語

太平記

盛衰記

戰國的女性

なをきりすつる者多きに、太平記に至りては、小楠公の母の如き、瓜生保の母の如き庭訓雄々しき戰國的女性を描くを好む。亦以て時代思想の變遷を見るべし。

御伽草子

近世平民文學の母たりしもの。此時代の末に發達す。因果應

御伽草
子と此
時代

報の理を含ませたる教訓物、又は英雄譚を多しとす。その形式は平安朝の物語によりたれど、その結構の大なく、又痛く通俗化せるは、文學を樂む餘裕なき時代の爲ならん。

狂言と
國民性

狂言

餘裕なき時代にも思ひ屈くせずして、狂言に笑ひ合ひしは、吾樂天洒落の國民性を明かにあらはせるものなり。上にいひし猿樂は最初は滑稽を主とせるものなりしが、能樂となるに及びて寧ろ嚴肅のものとなりたれば、その滑稽の一面を傳へたるものに狂言を生じぬ。その文對話より成りて當時の口語を存す。

どぶかつちり

勾當罷り出でたるは此あたりに住居仕る勾當の方でござる。左様に御座れば、今日は菊一を連れ、嵯峨へ參らうと存ずる。菊一あるか。菊一これに居ります。勾そなたを呼び出すは別の事でもない。嵯峨へ參らうとことぢやが、參りやらぬか。菊勾當様の參らさつしやれまするなら、參りませう。勾おぢやれ。菊往ままする。

勾のう菊一。あのとんと、云ふは川では無いか。菊あ、是はかい川と申します。勾いかう水が出たさうなぞや。菊待たしやれませい。瀬踏をして見ませう。石は無いか。ぢままてい、いえ有るは、ま此處へ打つて見ませう。ドブドブ。あ、いかう深さうな。上み手へ打つて見ませう。ヤエいどぶりかつちり。はあ勾當様上みへ廻らしやれませい。上みが淺うござりまする。勾ヤイ菊一。負うて渡せ。菊こな様も渡らしやれませい。扱。

道行人 罷り出でたるは道通りでござる。いや座頭が座頭を負ふて渡すと見えた。某が負はれて渡りませうす。勾ヤイ菊一。汝おのれを連る、はかやうな川なども負はれて渡らうと思つて連れ、急いで負へいの。菊こ、えござりませい。あ、いかう深うござりまするぞ。やうくの事して渡つたよ。道や

此時代
と前後
と期後
の文學
と關係

れきて、まん／＼と負はれて渡りました。句ヤイ菊一。汝ばかり渡つてなせに某をば置いて往たぞいヤイ。菊ワ句當様。又今の程負ひ越したに、足のまめななせに又そちらへ往かしゃったぞ。はれさて物數奇な目の見えぬ者をばあちらへこちらへさするが面白いか。ちやまてい、さ負はれさつしい。いえさて又負はれさつしやれ。面白ござらうの。句何を云ふぞいやい。菊何いふと事があるものでござるか。ハ、深い所へ這入りましたわいの。句これおどれ、何事しおつたぞ。菊轉びましたわいの。句やれさてぐつと濡らしおつた。菊始ので置かつしやりやよいこと、二度三度さつしやる所で、オ、濡れてさぶやな(下略)

蓋し和歌に對して俳諧體の連歌・平安朝物語に對して御伽草子・猿樂に對して狂言あるは、前代文學を味ふべき素養なき爲に、何れも平民的に通俗化せしめたる結果なりとはいへ、この爲に徳川時代の平民文學を開きたる功は没すべからざるなり。

平安朝時代

概説

鎌倉室町時代より平安朝1185-1189に入るときは、荒涼なる野路より繁華なる都會に進みし感なき能はず。いかにその政治史の第一頁の花やかなる。平安京は輪奐の美を盡し、坂上將軍の東征は長く蝦夷の憂を絶つ。而して當時わが國の唯一の模範たりし唐代は、支那歷朝にありても、最も文藝を貴びし者なれば、我國にもその風成りしに、剩へ文を以て家を興し、藤原氏遂に政權を握りしかば、その勢更にすさまじく、滔々としてやむ所を知らざりき。但しこの爲に、古來尙武の風失せて、文弱に流れしことは既にいひたり。

「吾王族當爲天子、公藤原氏能爲我關白乎」とは門閥の前には、

文藝を
貴びし
内外の
原因

歴史も才能もなきを證する言ならずや。此天慶の亂終りて、
京都は再び太平の夢を貪りしが、地方はこの時より解體し
初めて、亦延暦の昔に非ず。里内裏に一時を忍び給ふことと
なりぬ。

藤氏政
權を得
る方法
此世を
ばわが

當時交通の不便は京都と地方との隔絶を致したりとはい
へ、又かゝる地方の事情は念頭に上すことなく、藤氏一族は
政權の爭奪に維日も足らざりき。抑藤氏が政權を得る方法
は時の外戚たるにあり。こゝに皇后といひ、中宮といひて後
宮は天に二日ある觀あり。豈競争のその間に起るなからん
や。和歌の贈答はその才を現す所以なりしを以て、争うて才
媛をんを引きて己が用となしぬ。即ち後宮は文學の淵叢、女房は
文界の明星となりき。その文學があはれにつきくしきを
主とせる情念偏重に陥りしも亦宜なりけり。

世とぞ
思ふ望
月の：
藤原道
長

作者の
異動

「望月の虧けたることもしと思へ」るは道長一代の榮花の
みにて、藤氏の運命やうやく傾くや、文學も男子の手に移り
て作品著しく質實となりて近古時代に入れり。
此時代の文學を類別すること左の如し。

歌謠—和歌今様
散文—雜文學 物語

和歌今様

唐代文化の影響を受けて、弘仁の頃には詩文の勅撰を見し
が、延喜の聖代に和歌の復興するや、その株を奪ひて古今集
に二十一代勅撰の範を垂れぬ。

古今集

古今集は紀貫之・凡河内躬恒等の撰ずる所。用語と思想とよ
く調和して、穩秀流麗の妙を極む。之に後撰・拾遺を加へて三

1011 1060

代集といふ。

紀貫之
貫之は漢文の大家なる長谷雄はせをの孫なり。和歌は世に許され
けん、門閥既に成りし時に方りて、御書所預ごしょしよぞくまひの微官を以て勅
撰の命を拜して、和歌史上の一期を劃したり。

俊成と千載集
既にいへる新古今の前に千載集あり。その選者は藤原俊成とよなり
にて、所謂五條三位なり。抑三代集を以てかりに藤氏全盛を

五條三位と薩摩守忠度

代表せんか。院政時代には金葉詞花集きんぎょしけありて、新奇を求むる
餘りに、頗る古今以來の正風に遠ざかり。俊成この弊を矯め

歌合

んとて、勉めて高雅にして平淡なるものを採りて、この集を
成しぬ。又天徳の頃より歌合ありてその優劣を定めしかば、
遂に和歌にも師授を要することとなりて、技巧の詮義やか
ましくなりぬ。

今様

今様とは新體の義なれども、特に七五言四節より成れるも

の、稱となれり。かの伊呂波歌もその一なり。此期の中葉以
後盛に行はれ白拍子の舞には之を歌ひたりとぞ。

雑文學

雑文學には歌物語・日記・雜史・隨筆等の別あり。

伊勢物語

歌物語とは歌を主として、その歌に關係ある説話を加へて、
篇をなしたるものにて、伊勢物語・大和物語これなり。伊勢物
語は在原の業平を中心として記したれば、その傳記の如き
觀あり。

三河より駿河へ

伊勢物語

三河の國八橋といふ所に到りぬ。其處を八橋といふことは、水の蜘蛛手に流
れ分れて、木八つ渡せるによりてなん八橋とは云へる。その澤の邊に、木陰
に下り居て、*かれいひ食ひげり、その澤に杜若いと面白く咲きたり。それを

見て、或人の曰はく「かきつばたといふ五文字を句の頭かみにするて、旅の意をよめ」といひければ、よめる
 褱かたひから衣きつ、馴れにし妻しあれば、遙々來ぬる旅をしぞ思ふ。
 とよめりければ、皆人餉かたひの上に涙落してほとびにけり。ゆきくへて駿河の國に到りぬ。うつ山の山に至りて、わが入らんとする道はいと暗う細きに蔭かづらは茂りて物心細く、すゝなる目を見る事と思ふに、修行者あひたりりかゝる道にいかでかおはする」といふに見れば、見し人なりけり。京にそのもとにとて文かき附く

駿河なるうつの山邊の現にも夢にも、人のあはぬなりけり。

日記にも紀行と日乗とあり。貫之の土佐日記は甲に屬す。國文未だ盛ならざりし世とて、憚る所やありけん、女の書ける風を装ひたり。紫式部日記は乙に屬す。式部の徳操はこの書によりて證せらる。1070頃

正月七日

土佐日記

七日になりぬ。同じ港にあり。今日は青馬を思へど甲斐なし。唯浪の白きぞ見ゆる。中略今破子わらこ持たせて來たる人、その名などぞや今思ひ出でん。此人歌詠まんと思ふ心ありてなりけり。とかく云ひくへてぞ浪の立つなること、憂ひいひて、詠める歌
 行く先に立つ白波の聲よりも、後れて泣かん吾やまさらん。
 とぞ詠める。いと大聲なるべし。持て來る物よりは歌は如何有らん。此歌をこれかれあはれがれども、一人も返しせず。しつべき人も交れ、ども、之をのみいたがり、物を飲み食ひて夜更けぬ。

大鏡と
 榮花
 今昔物語
 雑史に大鏡・榮花物語あり。ともに御堂關白の榮花を寫すを主とす。但し榮花は關白を理想化して、之を謳歌するに止まれども、大鏡は、是を是とし非を非とし、事實の真相を窮むる所に、作者の批評眼を見る。又今昔物語あり。和漢・天竺の雜談を集めたるものに過ぎざれども、その文章の簡朴なる、自ら近古時代の和漢混和文の萌せるを見る。

兄弟二人植萱草紫苑語

今昔物語

今昔△△の國△△の郡に住む人有けり。男子二人有けるが、其父失にければ、其の二人の子共戀ひ悲ぶ事年を経れども忘る事無かりけり。中略而る間、漸く年月積て、此の子共公に仕へ、私を顧るに難堪き事共有ければ、兄が思ける様、我れ只にては思ひ可止き様なし。萱草と云ふ草こそ其れを見る人、思をば忘るなれ。然れば彼の萱草を墓の邊に植て見んと思て植てけり。其の後、弟常に行て、例の御墓へや參り給と兄に問ければ、兄障がちにのみ成て、不具のみ成にけり。然れば弟、兄を糸心疎しと思て、我等二人して親を戀つるに懸りてこそ日を暗し夜を曙しつれ。兄は既に思ひ忘れぬれども、我は更に親を戀る心不忘と思て、紫苑と云ふ草こそ其れを見る人、心に思ゆる事は不忘なれとて、紫苑を墓の邊に植て常に行つ、見ければ、彌よ忘ることなかりけり。下略

枕草紙

隨筆は枕草子を唯一とす。その銳き眼にて觀察したる事物を、巧なる筆にて品評せる間に、清少納言が博學を自負せる

御身譽かた腹痛きまでなり。

すさまじきもの

枕草子

晝吠ゆる犬、春の綱代、三四月の紅梅の衣兒の亡くなりたる産屋、火おこさぬ火桶、すびつ、牛惡みたる牛飼、博士の打續き女子生ませたる方違に往きたるに饗應せぬ所、節分はましてすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき、京のをも左こそ思ふらめ、されどそれはゆかしき事をも書き集め、世にある事を聞けばよし。人のもとにわざと清げに書き立て、やりつる文の返事、今もて來ぬらむかし、怪しく遅きと待つほどに、ありつる文の結びたるも、たて文も、いときたなげに持なしふくだめて、上に引きたりつる墨さへ消えたるを、おはせざりけり。若は、物忌とて取り入れずなどいひて、もて歸りたる、いとわびしくすさまじ。

漢詩漢文の盛

かく國文の盛になりしは、奈良朝時代の末に片假名、平安朝時代の初に平假名成りて、自在にわが國語を寫さるゝに至りしを最大因とす。さればその未だ流布せざりし間は、漢詩、漢文標

變風氣の

準文學として貴ばれ、續日本紀以下の國史、家々の詩文集等續々として出でたりしに、小野篁、菅原道真に及びては、何れも漢文の大家ながら、なほその和歌の世に傳はるを見るなり。

物語

竹取物語

物語の祖を竹取物語といふ。竹中より得たる赫哉姫を主人公とし、多數の貴紳之を得んと競争せしが、その效なく、姫は月界に仙し去るといふ筋なり。

空穂物語

ついで空穂物語あり。其至孝に感じて、熊より譲られたる杉の空に成長せし仲忠が、貴宮に對する失戀の悲を償ひて餘りある、その天稟の技藝美をたたへて篇を結べり。

落窪物語

落窪物語之時を同じうせん。繼母に苦しめられて、落窪にうき月日を送れる姫君が、少將の目にとまりて家門の榮を

源氏物語

極め、繼母は却てその實子にさへも責めらるゝ物語なり。かくて大なる源氏物語出でたり。先、光源氏と紫上とを主人公として、善盡し美盡せる境遇を寫し、後には薰大將と浮舟とを以て之に代へ、失敗破綻累りに至れる生活を以て、前に對照す。全篇五十四帖、脈絡毫も亂れず、人物活動し、文章穩麗なるは何たる才筆ぞや。

若紫の一節

「いといみじき花の陰に暫も休らはず、立ち返り侍らんは飽かぬ業かな」と宣ふ。岩陰の苔の上に並居て、かはらけ參る。落ち來る水の様など故ある瀧のもととなり、頭中將懷なりける笛取り出で吹すましたり。辨の君扇はかなう打ならして、豊浦の寺の西なるやと謠ふ人よりは異なる君だちなるを、源氏の君いと痛う打惱みて、岩に倚り居給へる、類無くゆゝしき御有様に、何事にも目移るまじかりける。例の筆、築吹く隨身、笙の笛持たせたるす

きものなどあり。
 僧都^{きん}を自ら持て参りて、是唯御手一つ遊ばして、同じくは山の鳥も驚し侍らんと切^きは聞え給へば、亂り心地いと堪へ難き物を」と聞え給へど、氣憎からず搔き鳴して、皆立ち給ひぬ。飽かず口惜し」といふ甲斐なき法師、童部も涙を落し合へり。まして、内には、年老いたる尼君たちなど、まだ更にかゝる人の御有様を見ざりつれば、此世の物とも覺え給はずと聞え合へり。僧都も、あはれ何の契にてかゝる御様ながら、いとむづかしき日の本の末の世に生れ給ひつらんと見るに、いとなん悲しき」とて目おし拭ひ給ふ。この若君幼心地にめでたき人かなと見給ひて、宮の御有様よりまさり給へるかななど宜ふ^よさらばかの人の御子になりておはしませよ」と聞ゆれば、打うなづきて、いと善うありなんと思ほしたり、^{ひな}雛遊にも畫書い給ふにも、源氏の君と作りいで、清らなる衣著せかしづき給ふ。

奈良朝時代

概説

こゝにいふ奈良朝

佛に倭せし時代

政治史にて奈良朝といふ語は都の平城京に在りし八十年を指せども、今は大化新政より以後をいはんとす。¹³⁰⁵
 隋唐文明の輸入は政治上に、大化の新政を起して、新に郡縣の制を布かれ、八省百官備りて、文物粲然の世となりぬ。從つて都城の制も發達して、平城京を定めらるゝに至れり。
 此時代は、上下を通じて佛に倭せし時代なれば、寺を興し佛を造り經を寫すにこれ日も足らず、之が爲に建築・彫刻の如き美術は非常に進歩したれど、文學はなほ之に副はぬ憾あり。さはれ宣命の文、萬葉の歌ともに質實雄大なること、却て平安朝の花やかなるのみなるには優れりといはる。

1305-1452

漢字の
利用

漢字は、此時代より、その義字たる外に、表音文字としても用ゐられて、平安朝に假名を起す徑路を示せり。
今便宜上記紀宣命・萬葉集として細説せん。

記紀宣命

記紀の
關係

記は古事記・紀は日本書紀の略なり。ともに開闢以來この時代の初までの歴史なり。古傳説の眞を傳へん爲に、記は種々の困難を犯して、國文に綴りしに、唐土崇拜の時好は之に満足せずして、紀の勅撰を見るに至れり。

宣命
の
關係

宣命とは今の詔勅の類なり。その體極めて莊重なれども、中に君臣和合の情溢れて、祖宗樹徳の深厚なるを見る。又風土記あり。浦島太郎・天羽衣等の傳説は既にこの中にあり。

新編
萬葉集
國史記
明ハス

萬葉集

古今と萬葉との相違は既にいひぬ。萬葉に雄大なる格調を起し、功は柿本人麿に歸せざるべからず。持統・文武の朝の人なり。や、後れて山邊赤人あり。好みて自然の景物を詠じ、各その特長を發揮して此集の雙璧たり。
赤人と同時に山上憶良あり。遣唐使の一行に加へられたるほどなれば、漢學の影響著しき歌人なり。大伴旅人・家持父子亦著名なり。その家武門の名族なるに、やうく藤原氏に壓

汝等醸八鹽折之酒、且作廻垣、於其垣作八門、每門結八佐受岐、每其佐受岐置酒船、船每盛其八鹽折酒而待。
乃使脚摩乳手摩乳釀八醞酒、并作假殿八間、各置一酒槽、而盛酒以待之也。

(紀)

せられて政治上に意を得ざるより、祖訓を述べ兒孫を戒むるものには、國民性を代表する作多し。

過近江荒都時歌

玉手次故火之山乃檀原乃日知之御世從阿禮座師神之盡櫻木乃彌繼繼爾
天下所食乎天爾滿倭乎置而青丹吉平山乎越何方御念食可天離夷者雖有
石走淡海國乃樂浪乃大津宮爾天下所知食兼天皇之神之御言能大宮者此
間等難聞大殿者此間等雖云春草之茂生有霞立春日之霧流百磯城之大宮
處見者悲毛

樂浪之思賀之辛崎雖幸有大宮人之船麻知兼津

左散難彌乃志賀能大和多與杼六友昔人爾亦母相目八毛

望不盡山歌

山邊赤人

天地之分時從神左備而高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者度日之
陰毛隱比照月乃光毛不見白雲母伊去波伐加利時自久曾雪者落家留語告
言繼將往不盡能高嶺者

田子の浦に打
出でて

見れば
白妙の
富士の
高根に
雪はふ
りつゝ
一人一
首

上古時代

概説

田兒之浦從打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪者零家留

神代の事悠遠にして知り難けれど、神武東征以前に若干の文明を有して、純粹なる國民性の既にそこに露れたる多し。神武元を大和の橿原に紀してより六百年、崇神・垂仁の朝鞞の下の時に變亂を見しが、景行に至りて熊襲・東夷の征討あり、仲哀・應神に至りて三韓の降服あり、内憂既に絶えて外交亦大に振ふ。これより三韓の文物技藝のわが文明を進めしこと幾何ぞ。特に漢學の傳來はわが文學史上尤も重要な事實とす。但し漢學の思想は、其尊祖尙禮にして實際的なる

三韓の
文藝傳
來す

佛敎我
に入る

その弘
布

に於て、大體固有の國民性と一致したり。

その後、允恭の朝には、姓氏1170を正さるゝあり、繼體以後三韓の
叛服常ならずしが、欽明十三年百濟國より佛敎を傳へぬ。
佛敎は未來敎にして、平等無差別をその敎義とす。わが國民
性と一致せざる論を竝たず。たまく蘇我・物部二氏の軋轢
は、その採否の論と結合して、政治上の問題となりしが、物部
氏破れて佛敎は蘇我氏の跋扈につれて廣まりぬ。時に聖德
太子あり、亦奉佛の念深く、奈良朝建寺造佛の例は此時1232に開
かれぬ。彼使を隋唐に遣し、こと亦此時よりなり。
上古には國字なく漢字の用廣からざれば、文學の發達も極
めて遅かりき。今傳説・祝詞・和歌として細説せん。

傳説

傳説に
あらは
れたる
國民性

天地開闢・天孫降臨の大より、因幡の兔・隱岐の鰐の小に至る
幾多の傳説は、かの記紀二書に採録せられて、建國の由來よ
り忠孝一致の國體を示せり。

大八洲の生成に皇室と國土との關係知られ、大國主の國讓
り、饒速日の歸順に皇室と臣民との關係知られ、禮節作法の
考は天の御柱の言舉直ことあひしに、清淨潔白の好は檍原あはせがの禊祓はらへに
著く、皇弟の暴行を怒り給はぬ大神の仁恕、天石屋戸の前常こと
夜の闇を物とせず、天宇受賣命の戲樂に高天原どよみ笑ひ
し樂天に至りては、誰か我國民性の淵源の深きを信ぜざら
ん。木花開耶姫さくやの談また草木を愛する面影を現すものたり。

祝詞

三種の神器儼として存して、天皇は現在にまします大神な

大神と
天皇祭
と政

祝詞の
思想

り、大神は過去にましく、し天皇なり。その過去にましく、
し天皇に仕ふるを祭といひ、現在にまします大神のこと向
け給ふを政といふ。知るべし、上古は祭政一致の世なるを。こ
の天皇即ち大神なりとは國民一般の思想なるを以て、國家
皇室の大事に際して神前に白し、祝詞亦個人の思想にあ
らず。然るに祝詞の思想には、氣宇宙を呑みたる進取的のも
のと、風旱水の害を攘はんことを願ふものとの二ありて、久
しく口々に傳はりしが、延喜中始めて記録せられて今に存
せり。

祈年祭

皇神能見霽志坐四方國者天能壁立極國能退立限青雲能靄極白雲能墜坐
向伏限青海原者棹柁不干舟艦能至留極大海原爾舟滿都々氣氏自陸往道
者荷緒縛堅氏磐根木根履佐久彌氏馬爪至留限長道無間久立都々氣氏狹

國者廣久峻國者平久遠國者八十綱打掛氏引寄如事皇太御神能寄奉
荷前者皇太御神能大前爾如横山打積置氏(下略)

和歌

長短歌の別未だ明らかならず、一句の語數亦定まらざれど、
長短句を隔用する傾は已にあり。その修辭としては疊句對
句或は枕詞盛に用ひられ、譬喩法は頗る進歩せるを見る。而
して詠ずる所は概ね抒情詩にして、その情感亦極めて率直
朴野なり。蓋し溫和なる氣候明媚なる山水の間に生息せし
わが國民には、深刻なる内省雄大なる想像は萌すを得ざり
しか。

神武天皇御製
於佐簡能於朋務露夜珥比苦瑳破而異離鳥利苦毛比苦瑳破而枳伊里鳥利
忍版大室屋人

苦毛ツ瀨シ都ツ瀨シ都ツ志シ俱ク梅メ能ノ固コ餓ガ勾ク頭ツ鴛ツ都ツ々ツ伊イ異イ志シ都ツ々ツ伊イ毛モ智チ子ク智チ豆テ之シ夜ヤ葬サ務ム
瑞 弘計王 久米 子 子 頭 髓 石 髓 持 擊 止 夜 葬 務
 伊イ儼ナ武ム斯シ盧ロ笮カ籛ハ訴ソ比ヒ野ヤ儼ナ擬ギ寐イ逗ツ愈ユ凱ケ婆バ離ナ弭ヒ企キ於オ己キ陀タ智チ曾ソ能ノ泥ネ播ハ宇ウ世セ儒ズ
稻 添 柳 水 行 鹿 起 立 其 根 來 朱

新體國文學史教本終

附録

不二山を詠める長歌及其の反歌

そがひ 背面「背面に云々狭きか
 も」ふり放け云々低きかも對句
 横なる 横たはる 駿河の海二句
 上に應ず

鬼念佛圖贊

蝸牛蠻觸の争 莊子に「有國於蝸之
 左角者曰觸氏有國於蝸之右角者
 曰蠻氏時相與争地而戰」とあり
 外面云々 華嚴經に「女人地獄使能
 斷佛種子外面如菩薩内心如夜叉
 とあり

奉加帳 神佛へ寄進の中に加へ奉
 るその額を記す帳 つくは帳に
 附くと鐘を撞くとを兼ね

出世景清

南無阿彌陀佛の音の略
 門左衛門が義太夫の爲
 に新淨瑠璃を作る始なれば出世の
 二字を冠したりといふ景清が平家
 の爲に頼朝を撃たんと東大寺の大
 佛供養に身を窶して入込みたるに
 畠山重忠に見顯されて牢舎の身と
 なり遂に頼朝の大度に感じて歸服
 するに至るを一篇の趣向とす
 色代す 敬禮す
 平家は云々 ともに屋島に在り

室山 二年十一月

水島 同閏十月この二戦は平氏の敗にあらす

鴨越 三年二月

餘すまじ 通さじ

さもしや 鄙劣なり

案のうち物 案の内勝算ありと打物(鑄物)に對して長刀、刀、槍などとを兼ね

三保谷 三保谷十郎國俊

心に任せぬ人心 人心は一時の感情 心には良心の判断

諫むる 戒慎す

鹽井川

東海道中膝栗毛の一節 この川は遠江國にあり

おぶさつて 負ひて

言語道斷 云はうやうなし

われ一人

名取川は仙臺にあり此は頼朝奥州征伐の時に詠めるなれば此地名を用ふ

かち渡り

徒と勝とを兼ね

雪ながら

第一句霞。第二句梅。第三句柳。みな春の景物なり

月 第四句月。第五句霜。みな秋の景物なり

物なり

景清

次第名乗道行地 みな謠曲の術語

なり、次第とはその次第を前置するやうに謠ふ一章の曲節なり、名乗はその身分をあらはす語、道行

は景物によせて地名を出してそこを經過せし意を示す文章なり

又地とは曲の主なるものならで

謠ひ手ありて引き受け謠ふ部分なり

消えぬ 風の便に父の露の身は未だ

消えずと聞けど今は果していかに成りつらんと云ひて父を訪ふ意を示す

人丸 景清が女子の名なり従者一

人従へて日向に赴きたるよし曲中にあり

涙片敷く 片敷くは衣の片袖を敷

く意にて偶^つなくて寝るに云ふ、こは思ひねの涙が床に浸みたる

それを敷きて寝るなり

とほとふみ 行方を問ふといひかけたなり

雲井 八橋に蜘蛛といふこと本文伊勢物語の例を見よ、それにかけた

り 彼者を 景清は己の薄命を耻ぢて

此子に會ふを嫌ふ故この語ありいで其頃 出世景清と對照せよ

逃がさじと 追ひかけてと語を足して見るべし

とてもいく程 逆も幾程の命か有らん此つらき生活にては行末も

近く迫れり 盲目の 謠曲にては景清は始より

盲目なり(淨瑠璃にてはいかに)暗
き所の燈火の如く悪しき道の橋
の如く跡弔はれんを頼みにする
の意その暗きに盲目のと自分を
あらはせり

とまる(景清行くぞ(入丸))

どぶかつちり

鹽井川と對照せよ

句當 盲官に―座頭などあり俗に

盲人を座頭といふもこれより起
る

ことぢやが參らうといふ―の當

時の語法

おぢやれ 來れ

瀨踏 淺瀨の探檢

ぢやまてい 感嘆詞

三河より

蜘蛛 八方へ打違へに

かれいひ 乾飯にて旅行に携ふる

飯後に、ほとびにけりとあり

句の頭 毎句の第一字、この體を折

句といふ

から衣 著るの枕詞、同音なるより

來にも用ふ

すゞろなる目 思の外なる目

修行者 道者

その人 意中の人、こゝはその妻か、

惟喬親王かならん

人のあはぬ あなたの思が足らぬ

やら夢にも見ぬと恨むなり當時

の思想にては甲が乙を思へば乙

正月七日

の夢に甲が見ゆと考へたり

同じ港 土佐國大湊

青馬 ――節會せちあひとして此日京都にあ

りし行事なり

白波の聲 船旅する人にこの語を

贈れるがさし合あひなり

これのみ これは歌をさすいた

がりは物を譽むる様にてをしる

意

兄弟二人

私を顧るに 家事を問ふ違なき事

ども

只にては 何か方法を講せずして

は

不具 借に往かず
懸りて 親を戀ふることにかゝづ
らひて

すさまじきもの 興醒むるもの

網代 冬日―へて魚を捕ふる

具

紅梅の衣 表紅裏紫十一月より二

月までに著るべきなり

博士の 學者の家男子を望む急也

方違 今東に赴かんとするに太白

神などの塞ふさがりにあたれば姑く南に

赴きてそれより左して東に向ふ

をいふ

節分 立春の前日、この日の方違な

り

人の國 地方(京)に對して

むすび文 書狀を卷きてその端を折り結びたるもの

豎文 鳥の子、薄様などの全紙を用ゐたる書狀

ふくだめて 揉みくしゃにす上に引きたりつる墨 封し目にひきたる墨なり

物忌 太白神などを避けて家に籠りて慎み居ること

若紫の一節 光源氏が瘡を病みて加持を頼まんとて北山に赴かれて紫上が(この時十歳ばかり)祖母の許に在るをかいまみられしがこの文は京よりの迎人とともに歸路につ

かるゝ所なり

かはらけ 杯

頭中將 葵上の兄弟にて光源氏の親友なり

扇打鳴らして 拍子を取る

豊浦の寺 催馬樂さいばがくに入れる歌にて當時酒宴には催馬樂を謠ふこと流行せり

人よりは 中將も辨の君も——云々なり下の「目移るまじかりにて源氏に對しては一向に見離されぬこと」なる

打惱みて 瘡の後

ゆゝしき御有様 立派すぎる程

僧都 紫上の祖母の兄弟

準備の一なり、

紀 記の文章と比較すべし

過近江荒都時歌

玉手次 玉は美稱「たすきは攀にて

畝の枕詞

御世從 御世よりにて神武以來

阿禮座師 生れ給ひし

知しめしゝを 此を感嘆詞にてこ

こ迄神武以來の例を述ぶ

なら山 大和國添上郡

御言の 尊みことなりたゞ音による

茂く生ひたる 此二句疑の意に見

る

大和多 曲わたにて水の廻流する所故

に淀むとつゞく

記

御手一つ 一曲弾じて

内には 「いみじき花の陰」に對すいとむつかしき、むさくろしき

若君 卽紫上

宮 父宮にて式部卿宮といふ

さらば 尼方の女房の若君に戯れ

いふなり

八鹽折之酒 八回醸し返したる醇

酒

もとほし まはす

さずき 今の棧敷

汝等 素盞鳴尊が櫛稻田姫の親な

る脚摩乳手摩乳を呼びかけ給ふ

なり此は八俣大蛇を待ち受くる

望不盡山歌

真淵のと對照せよ

いゆき 往きなりいは接頭語

時じくぞ 時ならず常に

祈年祭

二月四日に行はれ歳災作

らす風雨順應ならんことを祈る今

も神宮 奉幣二月十七日にあ

り

見雲す 見晴らす

壁立つ 遠く天際を見れば壁の立

てる如き様なるをいふ

墜り居向伏す 雲の下りて伏す如

きなり此四句は天地の限りの意

荷緒 緒を以て馬に載せ著くる荷

さくみて 踏み分く 青海原云々

は海路より奉貢するもの自陸云

云は陸路より租調を奉納するもの

立つて 直に上の荷前といふ

語にかゝる

寄しまつり給ふ 歴代の天皇に任

せ給ふ

荷前 諸國にて出来る調の初物

神武天皇御製

忍阪 大和國城上郡

久米の子 大來目部をさす此時道

臣命の率る給ふ所 命はかの大

伴氏の祖なり

頭槌い 頭槌も石槌も道臣命の佩

ける劍の名 いは歌の調にてつ

ついと延べていへるものかとい

弘計王

ふ説あり

稻筵 河の枕詞ならん

靡き起き立ち 此歌皇統なること

を柳に世の浮沈を水に喩へたる

なれば河添柳の水高き時は暫く

その水にひたる如く我等も世路

の艱難にあひては一時民間に沈

淪すとも水行きて干る時は柳の
水面に起き立つ如く我等も皇胤
は失ひ果てずとなり

其根 柳の根なり 億計弘計二王

丹波の縮見しぢみに隠れまし、時その

皇胤なることをほのめかさる、

歌なり此事によりて遂に清寧帝

の統を繼がるるに至るなり



明治四十二年十一月十二日印刷
 明治四十一年十一月十五日發行
 明治四十三年二月十八日訂正再版發行
 明治四十四年三月十五日訂正再版發行

岡井慎吾

岩田僊太郎

株式會社 東京築地活版製造所
 東京市京橋區築地貳丁目拾七番地

目録 振替貯金口座第二八〇九番
 東京市京橋區南傳馬町貳丁目五番地

發賣所

印刷所

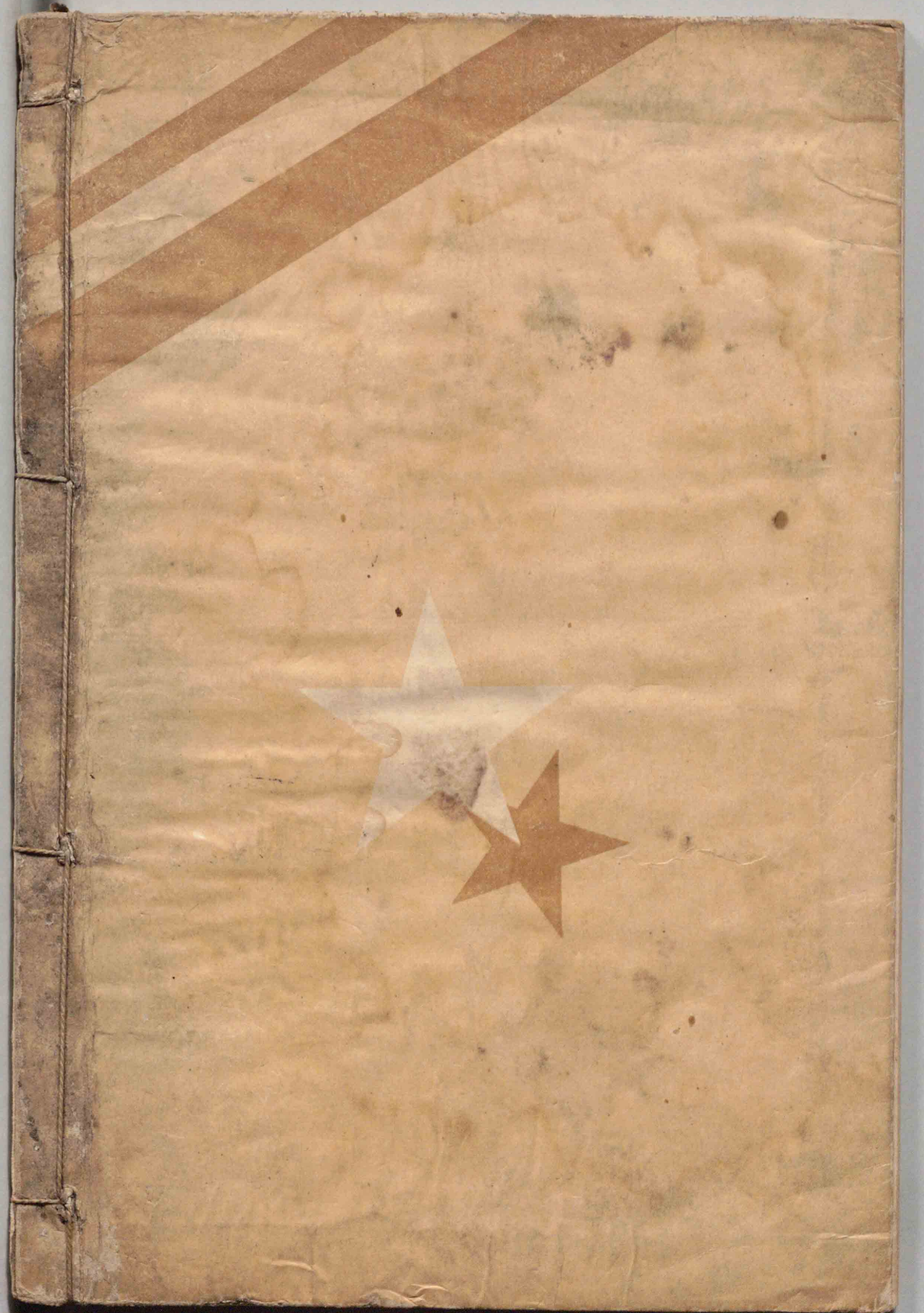
發行者兼

著者

新體國文學史教本
 定價金四拾錢

紀元元年	上古	和歌	祝詞	傳説
約 3,250 / 64	紀元1306	1305	宣命	記紀
3,500 / 64	奈良朝時代	149	雜文學	物語
10,000 / 64	紀元1454延曆十三	393	雜文學	御伽草子
10,500 / 64	平安朝時代	415	雜文學	小説
6,500 / 64	紀元1846文治二	269	雜文學	小説
1,000 / 64	近古時代	43	雜文學	小説
	紀元2260慶長五		雜文學	小説
	德川時代		雜文學	小説
	紀元2528明治元		雜文學	小説
	明治時代		雜文學	小説
	紀元2570明治四十三		雜文學	小説

子... (Handwritten vertical text)



文部省檢定濟

明治四十三年
二月二十六日
中學校教科用